

2014年 春季大会

特別セッション『ラウンドテーブル』の結果

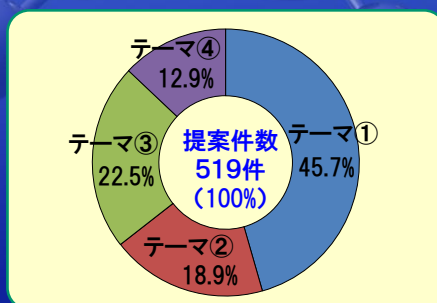
- ・日時：2014年 5月17日(土) 16:40～18:10
- ・場所：東京理科大学 野田キャンパス
- ・参加者：59人
- ・テーブル数：7
- ・総合司会：小酒井先生
- ・モデレータ：渡邊先生、田中先生、齋藤先生、孫先生、松林先生、小林先生、片岡先生

公益社団法人 日本経営工学会

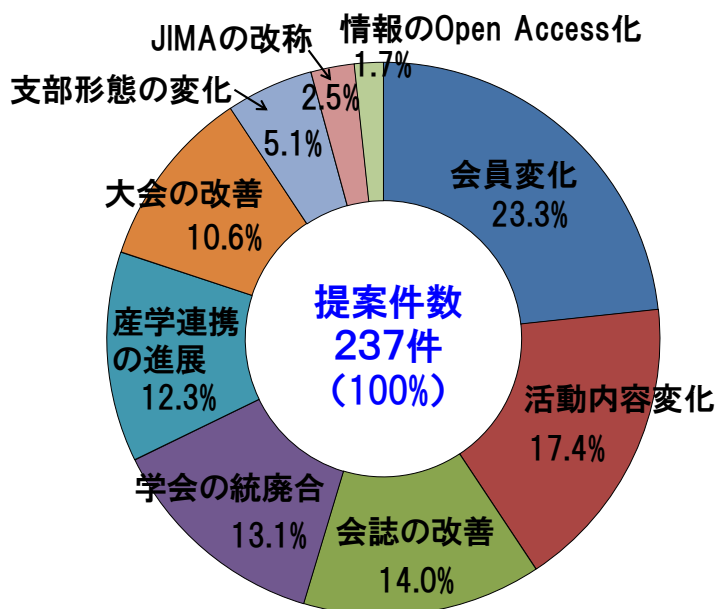
■課題：『JIMA全体の活性化のあり方を共に考える』

具体テーマ：

- ①今から20年後、JIMAはどんな状況になっていると思いますか？
- ②「JIMAが活性化している」とはどんな状況でしょうか？
そのために強化すべきことは？ 活性化を阻害するものは？
- ③「JIMAが国際化している」とはどんな状況でしょうか？
そのために強化すべきことは？ 国際化を阻害するものは？
- ④今から20年後、JIMAはどんな学会になってほしいと期待しますか？

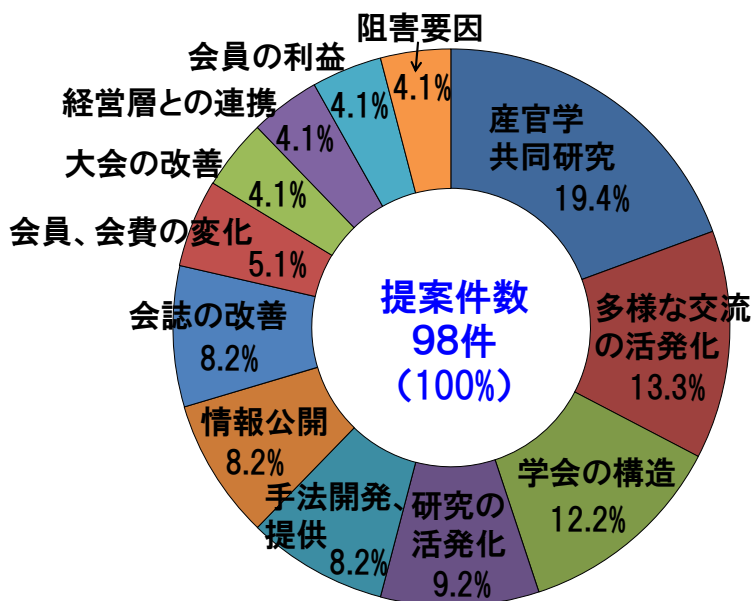


テーマ1: 『20年後のJIMAの状況は?』



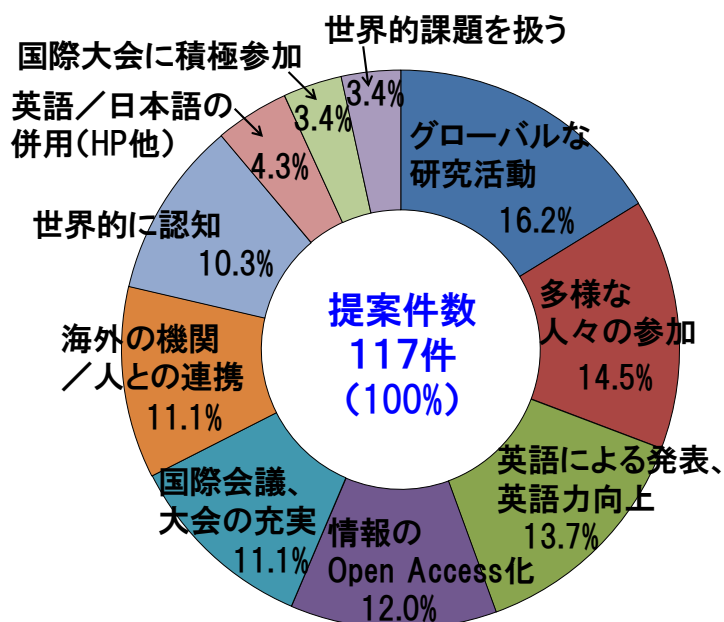
3

テーマ2: 『JIMAが活性化している状況とは? 活性化のために強化すべきこと? 活性化を阻害するもの?』



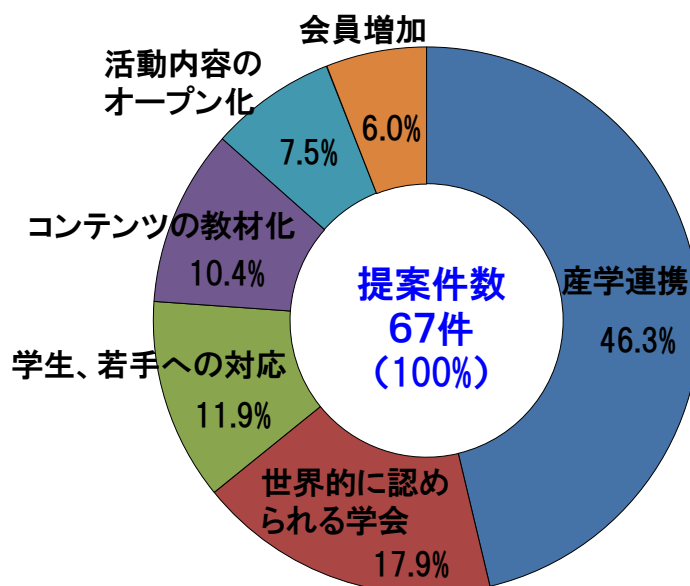
4

テーマ3: 『国際化している状況とは?』



5

テーマ4: 『20年後のJIMAの姿は?(期待)』



6

■関心の高かった(提案件数が多かった)テーマ

No.	大区分	件数 (件)	課題を さらに考えるテーマ	提案を 深掘りするテーマ	具体テーマを 検討する委員 会
1	産官学連携	79	—	・企業からの参加者を増やす ・産業に影響力をもつ研究	「研究・表彰」
2	会員変化	56	・JIMA会員数減少への対策 ・企業会員の増加策	・大学院生の会員を増やす ・会員種別と会費見直し	「会員・調査・ 人材育成」
3	活動内容変化	41	・活動(会員数、大会、財務等)縮小化	・活動対象の絞り込み ・高校生にJIMAの良さをアピール	「庶務」
4	会誌の改善	33	・学会誌への投稿が減る	・論文誌の英文化とWeb化 ・査読基準の見直し	「編集」
5	学会の統廃合	31	・JIMAの世界的立ち位置	・他学会との合併	「国際渉外」
6	大会の改善	25	・大会の見直し (目的、回数、セッション構成など)	・産業界(企業)、自治体の人が興味ある内容を増やす	「大会・企画・ 行事」
7	グローバルな 研究活動	19	・海外の人が抱くIEと日本の経営 工学との間のギャップ解消	・共同(海外含む)で研究を進める、 インフラ・方法のサポート	「国際化タスク」

7

補足資料

テーマ1：『20年後のJIMAの状況は？』①

■会員変化

グループNo. - テーマNo. - 区分No.

- ・S: 提案を深掘りするテーマ
- ・P: 課題をさらに考えるテーマ
- ・O: その他(現状記述など)

2-1-5	経営工学分野以外の参加者が必要になる	S	4-1-5	今のままでは縮小化はやむを得ない	P
3-1-5	大学以外の会員を増やす努力をする	S	4-1-5	会員数は減少	P
4-1-5	学生会員(院生)を増やす。そのためのインセンティブを！！	S	5-1-5	会員数増加により、地方ごとに支部ができる	P
4-1-5	縮小化を止めるためには、JIMAと大学院生をもっと近い状態にする	S	5-1-5	会員が大きく減る	P
4-1-5	会員増につながるよう、大学院生の数を増やす。また、大学院生が卒業してもJIMAをやめないようにする。	S	6-1-5	会員数は少ない	P
5-1-5	学生会費を安くして、学生参加者数をふやして学生の興味を増	S	7-1-5	会員の減少	P
5-1-5	学生にとっては、参加費、会員費が高く感じる。学生の間、一度だけ会員費を払う。	S	7-1-5	会員がほとんどいなくなっている	P
5-1-5	会費のかわりに、学会の参加費で学会支出を補う	S	7-1-5	若手ほどの学会も奪い合うはずなので、実務家へのアタックができないと減少	P
4-1-5	海外の会員費がたぐひになる	S	1-1-5	むしろ超高齢化して、80代、90代の会員が主流になっている	O
4-1-5	優秀学生プレゼン賞など、学生を積極的に表彰する	S	2-1-5	会員数、横ばい(大きな変化はない)	O
4-1-5	会員を増やすには、高校の教育内容にJIMAの内容を加える。	S	2-1-5	会員数 20%減、人口減による必然	O
4-1-5	会員種別を増やす。"社人"カテゴリーを。	S	3-1-5	日本独自の研究を深めることも大切?	O
5-1-5	会員という資格(?)をたどって、フリー会員(?)をふやす。	S	3-1-5	改革によっては、人を増やさないまでも、少なくとも人口減少に対応して減る程度。	O
7-1-5	実務家へはアタックするのではなく、口頭から、企業の方から来るようにする	S	3-1-5	減りはするが、若い世代が少しは増えているのでは?	O
1-1-5	JIMA会員数減少、少子化 (何もしなければ)	P	3-1-5	減るのは人口減少の割合程度、そのような改革をしよう	O
2-1-5	会員数はやや減少	P	4-1-5	会員数は倍増、海外からも大会への参加者がある	O
2-1-5	会員数はやや減少	P	4-1-5	会員は減り、参加者を増やす	O
2-1-5	会員数が減っていき、研究分野が細分化される	P	4-1-5	日本人の割合が減る	O
2-1-5	会員数は減っている	P	4-1-5	日本人という概念規定がなくなる	O
2-1-5	企業会員の減少	P	4-1-5	継続している。	O
2-1-5	参加企業がいなくなる	P	4-1-5	会員: 新入会員はないが、現存の世代力学のまま+20になり、高齢継続される	O
2-1-5	学界以外の会員が半数に近くなる	P	4-1-5	会員という枠組みが大きく変わっている	O
2-1-5	活動をカバーするために、会員数だけでなく、学界以外の加入者の増加が大きな課題になっている	P	4-1-5	若い世代が増えている	O
3-1-5	会員数減	P	4-1-5	海外での経営工学分野が増加しているように、日本でも大学に学科が増大	O
3-1-5	会員数は減少している	P	4-1-5	年齢層の幅が広がる。専門家と市民の交流	O
3-1-5	ほとんど会員はいなくなっている	P	5-1-5	リアルな人のつながりのため、会員が集まる。	O
3-1-5	若手は海外で学がなくなる	P	5-1-5	地方企業からの参加者が増える	O
3-1-5	若手ではなく、日本独自のものを研究しましょう	P	5-1-5	大学教員の正会員がほとんど、中国・韓国・日本の大学教員の集まりの場	O
4-1-5	若手が日本独自のもののみを研究したがるのかという点もあります	P	7-1-5	企業の会員が8割を占め、実用的な議論が活性化している	O
4-1-5	縮小化	P			

テーマ1：『20年後のJIMAの状況は？』②

■活動内容変化

グループNo. - テーマNo. - 区分No.

- ・S: 提案を深掘りするテーマ
- ・P: 課題をさらに考えるテーマ
- ・O: その他(現状記述など)

2-1-7	人数減による活動量の減りから、活動対象の絞り込みによる活性化	S	2-1-7	顔見知りが増え、緊張感がなくなる	P
2-1-7	人数減による活動の薄まりを解決するため、活動対象を絞り込む	S	2-1-7	内と外が明確に分かれてしまう状態	P
2-1-7	新たな対象業務(製造業以外)への拡大が提案・検討される	S	2-1-7	会員数減少による研究対象の固定化	P
7-1-7	複数の分野の研究者同士でのディスカッション	S	5-1-7	企業の利益を生む共同研究が増える	O
4-1-7	JIMA会員が協力して、複数の大学が協力した学科説明会などの開催	S	5-1-7	企業の人でも理論研究に興味をもっている方もいる。企業研究+理論研究	O
4-1-7	高校生向けのHP、スモホ用HPの整備をする	S	6-1-7	現時点で見られる研究はほとんど無く、新しいテーマが中心になっている	O
7-1-7	若い人(高校生)に良さをアピールして、まず知ってもらうことも重要	S	7-1-7	・分野の広がりを出せないと生き残れない ・今でも広がりはある。問題は、実務との乖離では？	O
5-1-7	賛助会員からテーマを出してもらって、学会内のグループで解決を試みるような活動に発展させる	S	7-1-7	・新しい分野を組み入れる柔軟性がないと、小さくなっているだろう ・現在でも柔軟性は高いのでは？	O
5-1-7	Webを最大限利用して、問題点(テーマ)をつのる	S	6-1-7	実務系の研究を中心とした論文誌(Web?)が刊行。	O
5-1-7	英文JIMA HPを作成し、中国、韓国、日本とそれ以外の研究者が参加しやすいように。	S	6-1-7	研究部門別の論文が発行される。	O
5-1-7	企業の課題解決を目的とするコンクールを開催	S	7-1-7	経営工学は現在も企業経営、生産システム等だけに適用できるのではなく、研究対象を増やす事は可能。	O
7-1-7	企業に対して(社長レベルに)アタック	S	7-1-7	伝える手段を広げる、新しい方法が生まれる	O
5-1-7	複数での共催を通じて、異文化コミュニケーションができるようになる。	S	7-1-7	共同研究の成果を大学でやることは、体系化していけばよくなる。	O
5-1-7	学生の集まりの場として発展させる。	S	7-1-7	学生が参加しやすくなる。費用など。	O
2-1-7	活動縮小 (会員数、大会、財務...)	P	7-1-7	分野のエリアが広がる	O
2-1-7	活動が縮小される	P	2-1-7	よりアカデミックな議論が増える	O
2-1-7	活動が縮小	P	2-1-7	手法中心になる	O
2-1-7	活動が縮小	P	7-1-7	それぞれの研究者が自分の得意分野をもつようになる	O
2-1-7	活動が縮小 ・参加企業数の減少 ・企業と大学の関係の乖離増大	P	7-1-7	得意分野を活かして、研究者が協力できるよう	O
2-1-7	研究がいつまでも現実にならない	P	7-1-7	学会としての厳しさを出していけないと、生き残れない	O
2-1-7	対外的な関係がなくなる	P			
2-1-7	企業側の手法適用先の提案が少なくなる	P			

テーマ1: 『20年後のJIMAの状況は?』 ③

■会誌の改善

1-1-3	経営システム誌 JIは廃刊、論文誌廃刊。	S
1-1-3	経営システム誌と論文誌を1つの雑誌として発刊する。	S
3-1-3	システム誌について、論文誌と差別化して役立つものにする	S
4-1-3	JIMA誌を維持して、博士号を大学で出せるようにする	S
4-1-3	ASIA領域から論文を募集している	S
5-1-3	もっと広い範囲をカバーする論文誌の方がいいのでは。	S
5-1-3	査読基準をきびしいO×論文誌になりやすい基準に	S
5-1-3	学術論文と応用論文を二重基準で査読	S
7-1-3	世界の評価に合わせる	S
5-1-3	他の学会の論文との関係性がわかるようにする。	S
7-1-3	学会の発表、論文誌はすべて英文にする	S
7-1-3	査読期間を短く。英文に特化した人の養成する。	S
7-1-3	英文論文誌のWeb化	S
7-1-3	Web化して冊子はなくなる。誰でも見られるようになる。	S
2-1-3	学会誌への投稿が減る	P
2-1-3	学会誌への投稿がなくなり、記事だけになる	P
7-1-3	海外論文誌との連携ができないという	O
2-1-3	新たなモデルの手法を提案するのはなく、解法についての論文ばかりになる。	O
5-1-3	アイデア提案(数多くできるものにする	O
5-1-3	論文は、ほとんど採用。	O
7-1-3	和文と英文の翻訳が軽減される	O
7-1-3	論文を書くことも必要なくなる。アイデアを出せればよくなる。	O
7-1-3	投稿論文の掲載費用がなくなる良いかも。本数はその方が集まる。	O
7-1-3	安易な形式が新たに生まれる	O
7-1-3	論文にしろなくても、発表したら評価される。	O
3-1-3	論文誌: 電子ジャーナルのみ	O
3-1-3	システム誌: なし	O
4-1-3	論文誌は一定定額化	O
5-1-3	論文誌の電子化+投稿資格制がなくなり、マネジメントサイエンスの総合誌となる	O
5-1-3	分野の細分化にもなって、統合された雑誌ができて、その一分野として存在できる。	O
6-1-3	学会誌が毎月刊行され、情報発信力が高まる	O
7-1-3	発表しやすくなる	O
7-1-3	業績の扱いによって大きく変化する	O

■学会の統廃合

1-1-2	日本に大学がまだ残ってれば他学会と合併して何とか存続。	S
2-1-2	別の学会と統合	S
4-1-2	経営工学領域を合わせた学会になる	S
7-1-2	合併したものはJIMAなのか? 実務に即した研究事例を多くする?	S
5-1-2	JIMA+OR+QC(+g)で大きな力サ組織を作り、そこに移行してゆく	S
5-1-2	解体、他学会との合併。大きな学会の中で、経営工学部門となる。	S
5-1-2	他の学会と協働(合併)して、生き残る。	S
5-1-2	他学会と外国の学会と連携を強化	S
2-1-2	経営工学3団体が統合される。	S
2-1-2	IE協会に統合される	S
7-1-2	IE協会等.....との統合化	S
7-1-2	IE協会、技術士会、JIMAだけではだめなので他と合併	S
6-1-2	日本IE協会、日本技術士会とも連携した大組織になる	S
5-1-2	日本(関東、関西)、中国、韓国の研究者の研究交流の場	S
7-1-2	他の学会との交流、海外など	S
5-1-2	FMESのような大きな枠組みの中の一つとしてでも存在できるような働きかけが必要ではないのか?	P
7-1-2	他学会との違いを主張できない学会。何をやるのかわからない。	P
7-1-2	同じく、違いがなくなる	P
7-1-2	棲み分けをすると、逆に狭く、人が集まりにくい	P
1-1-2	Networks of academic society will be weaker and weaker. (学会のネットワークはますます弱い)	O
1-1-2	JIMAを含めて、IEに関連する学会のいくつかが統合して、大きな団体となっている。	O
2-1-2	学会吸収される	O
2-1-2	対外組織との連携が弱まる	O
5-1-2	合併した中で、中心的な位置となっていればいい。	O
5-1-2	異分野融合で、いろいろなテーマが出る	O
6-1-2	FMESが(結果的に)統合して、「経営工学部門」になっている	O
7-1-2	JIMAの主体の経営工学分野が他分野と重なり、学会合併している	O
7-1-2	他学会と合併して、学問分野を守ることにこだわることになる	O
7-1-2	JIMAは、幅広いのが特徴。それ生かす	O
7-1-2	経営工学の分野を用いたものは、他学会の中での研究にもある。?、そのことを知る。	O
7-1-2	合併すべき学会が見つからない	O

テーマ1: 『20年後のJIMAの状況は?』 ④

■産学連携の進展

6-1-6	研究分野の拡大により、会員数が増加する	S
6-1-6	テーマが産業界に分類されている	S
7-1-6	企業と共同研究を増やす。実際に即す。	S
7-1-6	複数学会や団体との共同研究会を開く	S
6-1-6	企業人会員と研究者会員の日常的交流が活発化	O
6-1-6	委務的な新しいテーマと企業人教育連携がおきる。	O
6-1-6	産学連携の成果の特集号が発刊される	O
6-1-6	共同研究の企業内のみならず、同じ業界内で成果が共有	O
6-1-6	海外企業との成果共有が起きて、世界的な発展が見込まれる	O
6-1-6	実務教育が一つの部門のようにになっている。	O
6-1-6	新しい産業についての研究が特集号として発表される	O
6-1-6	企業からの問題提起が多数ある。	O
6-1-6	企業での事例研究についての論文が増えている	O
6-1-6	学会主催のセミナーに実務家が多く参加する。	O
6-1-6	経営分野では企業人向けの大学院教育が中心となる。	O
6-1-6	企業人会員が研究者会員並みに増加	O
6-1-6	理論系と実務系の研究が、それぞれ活発に!	O
6-1-6	より産業界に密接に組み入れられた立ち位置にある。	O
6-1-6	産学共同が進んだ学会	O
6-1-6	大学の研究者と企業の実務家との共同研究発表が増える	O
6-1-6	研究プロジェクトが多数立ち上がっている	O
6-1-6	面白いテーマがたくさん、研究者、実務家も多く集まる学会になっているから、メンバーは一新されている	O
6-1-6	分野ごとの研究発表(大会)が開催されている	O
6-1-6	研究部門ごとの研究会やセミナーが多く開催される	O
6-1-6	企業からの参加者にも分りやすい内容で研究会等開催される	O
6-1-6	製造業のみならずサービス産業からも多数参加	O
6-1-6	製造業とサービス業の共通認識から新しいテーマが生まれる	O
6-1-6	製造業、サービス業という旧来の区分に入りきれない産業が生まれてい	O
7-1-6	産業界との共同研究が増える	O

■大会の改善

1-1-4	We should contain the name "IE" in the conference name to specify our subject area. (後援者にIEの名前を入れるべき!)	S
2-1-4	※範囲の限定 大会の意義を新たに討議して、あるべき姿での活動と情報共有を模索する	S
3-1-4	産業界が困っている問題を取り上げる	S
3-1-4	産業界のメンバーがビジネスの観点で質問する	S
3-1-4	・会社・企業の人々が興味ある内容を増やす ・自治体も必要では	S
4-1-4	他学会との大会の共同開催を推進する	S
5-1-4	大学生・大学院生の参加がしやすいようにする	S
5-1-4	日本の有名リゾート地で、大会で海外から多数参加	S
5-1-4	大会は国際会議との共催となる。(日本語セッション?)	S
5-1-4	学会を年1回にして、1回をもっと大きな大会にし、参加者を増やす。	S
2-1-4	大会がなくなる	P
4-1-4	大会は参加者が減る。	P
2-1-4	セッションの区切りが大まかになる。	P
2-1-4	区切りが無くなる	P
2-1-4	大会の数が減る	P
2-1-4	大学のみでの発表となる	P
2-1-4	大学交流会のようになる	P
3-1-4	発表の目的が分かりにくいが多い	P
2-1-4	共同研究の成果発表が多くなる	O
3-1-4	産業界の人が多く参加する学会の取り組みが参考になると思います。	O
3-1-4	大会2回/年-1回/年	O
4-1-4	学会の存在意義、大会のあり方が全く変化している	O
4-1-4	論文投稿数の確保が難しくなっている。大会参加者数も減少しているのでは?	O
5-1-4	春季大会が国際学会となり、海外の参加者が多数。	O
6-1-4	大会により、産業界から多数の参加	O

テーマ1: 『20年後のJIMAの状況は?』⑤

■支部形態の変化

5-1-8	地域間競争で、支部の予算配分額を法定。	S
5-1-8	支部はあるけど、どこに参加してもOK	S
5-1-8	都市の会員が地方の支部に参加する	S
4-1-8	支部の活動は低調化	P
3-1-8	支部なくなる	O
4-1-8	支部: 複数の支部が吸収・合併されている	O
4-1-8	種かにありますね。支部会合の出張 or テレビ会議が増える	O
4-1-8	支部のエリアが狭くなる	O
4-1-8	支部も圏外もなくなる	O
5-1-8	支部が統合されて、数が減っている。(半分くらい)	O
5-1-8	関東支部、関西支部の二部体制になる	O
5-1-8	人口の都市への集中もあって、学会として関東・関西(あるいは関東のみ)のみの活動に制限される	O

■JIMAの改称

1-1-1	「経営工学」→「総合マネジメント学会」	S
1-1-1	「経営」の意味が、現状わかりにくい。統合時の名称。	P
1-1-1	☆名称変更	O
1-1-1	現状名と差激にギャップ	O
2-1-1	経営工学会ではなくなる	O
6-1-1	経営工学会という名称ではない。	O
6-1-1	IE、OR、MS(management science)に関連した名称に変わっている。	O

■情報のOpen Access化

5-1-9	刊行物はすべて電子化されている	S
5-1-9	会員のみが見られるようにする。発表PPTも電子化する。	S
5-1-9	発表がYouTubeで見られる。	S
5-1-9	Web2.0(知的生産物)やJST(科学技術振興機構)の電子化の流れにのって、研究成果を広く公表できる場は必要。その上で、電子的コミュニケーションの活発化。	S

テーマ2: 『JIMAが活性化している状況とは? 活性化のために強化すべきこと? 活性化を阻害するもの?』①

■産官学共同研究

グループNo. - テーマNo. - 区分No.

- ・S: 提案を深掘りするテーマ
- ・P: 課題をさらに考えるテーマ
- ・O: その他(現状記述など)

■多様な交流の活発化

2-2-1	提案手法を策に入る企業とのマッチアップ(整合)ができて、共同研究を行う。	S
2-2-1	研究費が企業から出る	S
2-2-1	企業が研究費をだし、学会を運営していく	S
5-2-1	企業の人の参加は無料に	S
5-2-1	優れた経営工学実践に対して、賞を	S
5-2-1	企業の人が入りやすい仕組みをつくる	S
5-2-1	企業からの参加者には無料の昼食を提供。	S
6-2-1	企業(会員)に対して魅力的な情報提供	S
6-2-1	JIMA主催の企業人教育の機会を増やす。	S
2-2-1	企業からの手法適用先の提案増加	O
2-2-1	産官学のベクトル合わせ、推進力強化	O
2-2-1	企業だけでなく官も参加する	O
5-2-1	企業から研究テーマを提案してもらっている状況、信頼されているということ。	O
5-2-1	企業に対するプロモーションを多くすることが必要。	O
5-2-1	企業の学会参加が増えるといい	O
5-2-1	産業界に経営工学を学んでいる学生に一目置いてもらえる状況	O
5-2-1	企業から研究テーマを学会の研究会で引き上げられる体制。	O
5-2-1	企業から研究テーマを出してもらって、学会の会員と協働して研究している	O
6-2-1	産業界に広くJIMAの存在、活動を知ってもらう	O

2-2-2	技術分野だけでなく、業種対応での交流を進める	S
5-2-2	大会参加者は、発案セッションに必ず参加し、質問を必ず行う。	S
5-2-2	学生、賛助、正会員のメンバーが集まるラウンドテーブルを強化させる	S
5-2-2	学生と先生方のラウンドテーブルを増やして、学生の刺激を増やす。	S
5-2-2	ラウンドテーブルを毎回行い、JIMA正会員と非会員との意見交換や議論の場を設ける。	S
6-2-2	他学会との連合も進める。学会の合流も。	S
6-2-2	異分野との交流を積極的に進めて、知見の共有から新しい発展を図る	S
2-2-2	交流会を開く	O
2-2-2	大会以外でも交流が頻繁	O
2-2-2	対外的な交流に拡大していく	O
3-2-2	大企業、中企業、小企業、多様な企業の参加を求める	O
4-2-2	企業への参加を容易にする	O
5-2-2	活性化とは、たくさんの人が集まり、自由に討議できる	O

■学会の構造

3-2-3	若い人(例えば40歳未満)からも理事ができるようにする	S
3-2-3	若い人が何に興味があるかを調査する	S
4-2-3	会員を増やすためには、「大学院生」を増やすことです。※学費を安くする?	S
6-2-3	まず、重点分野を決めて集中投資する	S
6-2-3	重点分野は日本、国際社会での経営的なニーズを吸い上げ選定	S
6-2-3	どの分野に集中投資するかを市場メカニズム(予測市場)で決定する	S
3-2-3	話題を出し、やり場をつくる	O
3-2-3	日本だけでなく、世界で活動できる人が育つ	O
3-2-3	身近な学会(大学)に講演に来るなど	O
3-2-3	新しい領域に踏み込むことはいらないと思います	O
3-2-3	むしろ若い世代を取り込めるのでは? (ITに強いので)	O
3-2-3	おもしろい実がなるところ(自分の熱をもたらずとところ)には人は集まる	O
4-2-3	会員数が多い学会	O

■研究の活発化

3-2-4	出入り易い研究部会	S
5-2-4	共同研究(他大学の先生同士)が増える	S
5-2-4	コンサルに負けない具体的研究	S
6-2-4	他学会と研究大会を共同で開催する	S
3-2-4	論文作成のための研究ではなく、育成する研究会が必要	P
3-2-4	論文を書く/書かないという点より、他の学会がやっているような、学会内での研究面でのつながりが不足している	P
3-2-4	・新しい研究を生み出す ・大変大切です。社会に貢献したいですね ・私の知る限り、その目はあると思っています、なぜか他の学会で指摘されました。 ・そう思います ・世の中に徹底的に役立つ研究を、例えば「経済コントロール」 ・社会に役立つ研究をしていく	P
2-2-4	・効果的な研究が増加する ・研究コンペを行う	O
2-2-4	研究活動が活発になる	O

テーマ2: 『JIMAが活性化している状況とは? 活性化のために強化すべきこと? 活性化を阻害するもの?』②

■手法開発、提供

3-2-5	経済を、ある程度コントロールできる方法を発明して、そのリーダーとなる	S
3-2-5	現場の課題を解決できる会になる	S
3-2-5	学会で教育システムを作る必要がある	P
2-2-5	研究が形になる学会になる	P
2-2-5	経営に資することによる日本活性化への貢献	O
3-2-5	NEW/OLDのIE手法のチュートリアル	O
3-2-5	足りない新技術を学ぶ場があるといい	O
6-2-5	日本の「ものづくり」のknow-howに加え、know-whyまで海外に輸出する	O

■情報公開

6-2-6	JIMAがYouTube上に番組を持っている。	S
3-2-6	経営工学が有用な事をTVで宣伝する	S
6-2-6	数分程度の経営工学分野用語説明の番組をつくる	S
6-2-6	TwitterなどSNSを使って情報を提供する。	S
6-2-6	・論文誌、システム誌がインターネットで無料でダウンロードできる ・論文に関する講演会等の情報も入手できる ・それらの情報をより広いチャネルで提供する	S
3-2-6	透明性の高い、何をしているかが分り易い活動	O
3-2-6	IE協会など対外的なアピールを行う	O
6-2-6	知識の共有から価値を生み出すためのフレームワークが学会のホームページ上に出現する。	O

■会誌の改善

3-2-7	システム誌について、論文誌と差別化して役立つものにする	S
3-2-7	海外のIE誌と共同発行	S
4-2-7	論文の多様性を認める。さまざまな種類の論文を受け付ける。論文誌をPDF化し、カラーOKとする。	S
6-2-7	投稿をしやすく掲載料の低減	S
6-2-7	投稿することに対する何らかのインセンティブを付与する	S
6-2-7	ショートペーパーが増えて、最新事例共有が進むようにする。	S
6-2-7	論文の評論が集合知的に行われる。	S
6-2-7	論文の投稿数が増える	O

■会員、会費の変化

5-2-8	年2回以上、学会活動に参加した者には学会費を半額に。	S
5-2-8	・会員制をやめて、Free参加の学会にする ・参加者は増加する ・運営費用をどうするか ・企業から寄付をもらう	S
5-2-8	会員の半分は企業人	O
5-2-8	企業の人も入会が増える	O
5-2-8	会員同士のつながりを増やす	O

■大会の改善

6-2-9	・大会をシングルトラックにしてTED方式にする ・上のための会を、別に設定する ・春か秋の大会の半日程度、その方式にする ・ネットワーキングの前に実施し、さらにネットワーキングで討論	S
3-2-9	業種・業界別のセッションを設ける	S
5-2-9	高校生が大会を見にくる。	S
6-2-9	経営工学周辺分野(経営学?)の招待講演などを進める	S

■経営層との連携

2-2-10	他のセクター、特にサービス産業・経営層との連携	S
2-2-10	実際の経営への展開を進めるために、中規模企業の経営層との連携を	S
3-2-10	学会は経営の中心となる	O
3-2-10	JABEE(日本技術者教育認定機構)への参加率で、経営工学が低いのも	O

■会員の利益

4-2-11	学生発表を促進するために、奨励賞(プレゼン賞的なもの)のみたないもの	S
5-2-11	・就職の時に役立つ ・卒論	S
5-2-11	発表者の学生、実務者に対して、賞金を	S
5-2-11	学会にいて、会員が恩恵をうける状況が活性化	O

■阻害要因

5-2-12	できるだけ、仕事は専任の人にまかせる。	S
5-2-12	日本語論文→英語論文は、業者にまかせる	S
2-2-12	企業の秘密保持が厳しく、手法適用先を提供できないことが活性化の阻害要因	P
5-2-12	学会に仕事をするために出てきてる状況は最悪!	P

テーマ3: 『国際化している状況とは?』①

■グローバルな研究活動

グループNo. - テーマNo. - 区分No.

・S: 提案を深掘りするテーマ
・P: 課題をさらに考えるテーマ
・O: その他(現状記述など)

■多様な人々の参加

3-3-7	協同研究のような場があるとい	S
3-3-7	共同で研究を進める、インフラ・方法のサポート	S
2-3-7	海外研究のベンチマークワーキングの展開(定期開催)	S
3-3-7	各国が必要としている研究テーマを出し合う	S
3-3-7	日本でしかない研究を深めて行く	S
3-3-7	外国の人が興味を持つテーマを知ることが大事	S
3-3-7	共通する一つの問題(テーマ)に注力した会議	S
7-3-7	海外事例を発表する場と、そこで発表したらメリットがある仕掛けを作る	S
7-3-7	日本独自の要素を世界に発信することも研究としてはあり?	S
7-3-7	外国論文の最新成果をまとめて日本研究者で紹介すること	S
3-3-7	海外の人が抱くIEと日本の経営工学との間にギャップがあるような気が!	P
7-3-7	実務の世界との乖離が危険。日本企業のグローバル化と連動しないと	P
7-3-7	国際化のためのコミュニケーションをとれる手段を考える	O
3-3-7	共通の研究テーマで発表し合うことは大切ですね。	O
4-3-7	グローバル化という言葉が死語になっている	O
4-3-7	国内・国外の意識がなくなる	O
7-3-7	日本ではなく、アジアという意識が強くなる	O
7-3-7	とにかく、海外に行く(企業へ)	O
7-3-7	単線に海外と飛ばないで、国内企業の海外事例を活かす。	O
1-3-5	・留学生も参加できるように2/3以上を英語化。	S
3-3-5	・海外からの参加者と観光、懇親会(飲み会)、見物(例えば、浅草、富士山など)をおこなう	S
3-3-5	・東京ディズニーランドの地下(オペレーション)とか ・海外の工場見学をするし、海外からの会員へも日本企業の工場見学をさせる ・工場だけに限る必要はなく、SCMの上流から下流までたどるツアーとかどうでしょう? ・工程の全ての流れをみることは大事ですし、親しみやすい	S
5-3-5	会員の半分が国外の研究者であり、国際的学会になる。	S
5-3-5	海外の後進国のビジネスマンが相談にくる	S
1-3-5	JIMAの国内学会でも、海外の方が多く参加し、様々な意見交換が進む。(国内外の事例交換)	O
1-3-5	・留学生の参加	O
2-3-5	海外の研究者も食めたJIMAにする	O
2-3-5	海外を含めた企業からの参加が増加する	O
2-3-5	海外からの参加者比率の高い学会	O
2-3-5	コンテンツの有効活用→海外からの参加	O
4-3-5	文化が共通の基盤となる → グループ化	O
4-3-5	アカデミックな組織からの参加者だけでなく、産業界からの参加者が半数以上。	O
4-3-5	賛助会員のためのセッション or 展示を設ける(現在でもあるが、学際色は強くなくても良い)	O
4-3-5	世代間ギャップがないこと。 空気を読み過ぎないこと。	O
5-3-5	国際的な経営工学の議論となる。	O
7-3-5	国際化=海外の人とは思わず、日系人の国際経験を活かす。	O

テーマ3:『国際化している状況とは?』②

■英語による発表、英語力向上

2-3-10	英語による発表大会を行う	S
2-3-10	英文・英語による発表枠設置と拡充	S
2-3-10	発表が英語翻訳される	S
2-3-10	英語の会話・発表能力を強化する教育への提言および積極的活動を推進	S
3-3-10	発表内容、使用言語を英語だけにする! ・むしろ、何語でも良くする? ・日本語の発表も大事にする	S
7-3-10	・すべて英語での論文と発表にする。 (実務者との乖離の副作用?) ・校正費用がなければ	S
3-3-10	英語だけが良いけど、聞き取れない	O
2-3-10	・英語化を意識した発表	O
2-3-10	・論旨のよりロジカルな構成が追及される	O
2-3-10	英語力と共にコミュニケーション能力の強化	O
3-3-10	日本の言語を大切にしたい	O
4-3-10	英語の授業内容を増やし、かつ本格的な内容にする	O
7-3-10	(残念ながら)英文による論文誌のみとなる	O
7-3-10	・英語で論文を書くことが基本になるという文化が必要 (JIMA日本語の廃止?) ・英語化の前に、思考を整理する	O
7-3-10	論文を英語で、 Webi上げる(日本語も)	O
7-3-10	・外国企業のトップとサンで話せるような、英会話力、研究力の育成 ・英会話力は個々の力による	O

■英語/日本語の併用(HP他)

1-3-6	To have both languages (English,Japanese) for each promoting information e.g. website of JIMA (各推進情報(例えばJIMAのウェブサイト)ごとに両方の言語(英語、日本語)があること。)	S
2-3-6	せめて、予稿集、PPTは英語とする	S
1-3-6	Only themes treating Japanese cultural things will be in Japanese. (日本の文化的なものを扱っているテーマだけが日本語である。) →英文化が必要!	O
1-3-6	英語論文の増加	O
4-3-6	国際海外でJIMAのHPの英語化をする	O

■情報のOpen Access化

2-3-9	WEBを用いた情報発信(用語集、改善事例)	S
2-3-9	SNSを使用したJIMAの行事の発信	S
2-3-9	会員/非会員を問わず情報の発信と共有化	S
2-3-9	YouTubeやUstreamで一部を配信する	S
2-3-9	海外からでも予稿集、PPTが見えるサイトを作る	S
2-3-9	海外中継を行う	S
4-3-9	JIMA誌がインパクトファクター向きのジャーナルになる	S
4-3-9	ジャーナルが世界中で配信されている	S
4-3-9	ジャーナル、論文誌のPDF化	S
4-3-9	日本人の海外での受賞が増える。通訳付きジャーナルへの会議論文からのセレクトが増える。	S
4-3-9	論文誌の英文化をうながす。 機械翻訳の技術が進み、これまでのJIMAの優秀な論文を英語で出版。(これからでも可)	S
1-3-9	・論文誌はOpen Access的になっている(全世界が)	O
3-3-9	・20年先には、電子化せずface to face ・??は少なくなる。 ???その反省が起こる	O

■海外の機関/人との連携

2-3-3	・海外の学会と共催する ・英語でディスカッションをする	S
2-3-3	海外企業の改善事例の紹介、発表の場の提供	S
3-3-3	世界の巨団体とアライアンスを組む	S
3-3-3	海外の学会と連携して、相互に研究会に参加し、発表する(英語となる)	S
4-3-3	ICPRのAsia領域と合流させる(実際、研究生で可能では?)	S
7-3-3	・国際的学会と連携する ・連携するために交流の機会を増やす	S
7-3-3	海外の企業との活動	S
7-3-3	海外の企業への講演や交流(外国人、海外経験の日本人)を多く開催	S
7-3-3	特にアジア圏の人と協働する	S
7-3-3	JIMAが海外の発表者を支えるしくみ ・他の海外の団体と一緒に活動する ・一緒に無理でも連携する ・他の団体と一緒に活動しても、JIMA独自性を失わないよう とりあえず、交流、連携できるような仕掛けを作る	S
1-3-3	・国内連合→海外との連携 ・海外の方との連携	O

テーマ3:『国際化している状況とは?』③

■世界的に認知

3-3-2	日本で聞く国際学会を増やす	S
3-3-2	あまり気張らず、国際会議を増やせばよい	S
1-3-2	・JIMA発のアイデアが世界的に認知され、利用されている ・「アイデア」が有効なるには、人類の幸福な生活を実現する。 ・「アイデア」の周知、権利を明確にする。(特許の仕組みの改善)	O
2-3-2	世界的に認められる学会	O
3-3-2	・「JIMAのJ」を取る ・素晴らしい考え。ただ、具体的な提案が必要では	O
3-3-2	他国と競争できるものを生み出して行く	O
3-3-2	日本発の経済コントロール、手法なんて????????	O
3-3-2	とある近い学会(日本ではない)では、2年に一度は国際会議を近くの外国で開催しています ・すでに、ある程度やってそうなイメージです	O
3-3-2	いろいろな学会からも発表できる	O
4-3-2	JIMAのJの文字の意図が変わる	O
4-3-2	JIMAからジャーナリズムをとる →あり得ますね。	O
4-3-2	・国際化されている: JIMA主催の国際学会がある(ICPR, APIEMS以外で) ・国際化されていない: 学会としての意思統一がされてない	O

■国際大会に積極参加

2-3-4	代表者を海外の学会に派遣する	S
7-3-4	講演を聞くだけでなく、聞いたことのお返しをする	S
1-3-4	Attend JIMA early year e.g. USA,UK,Europe,Southeast Asia, etc. (JIMAは、毎年(例えばUSA,UK,Europe,東南アジア、その他)に参加すべき) →国際化を進める。オープン化	O
1-3-4	・東アジアの連合学会の一支部となっている。 ・JIMA会員は他国の大会にも参加する人が多くなる。	O

■国際会議、大会の充実

4-3-8	やはり、日本国内での国際会議の開催	S
4-3-8	国際会議を毎年、開催する。	S
4-3-8	年次大会を国際会議にして、毎年開催	S
4-3-8	JIMA主催で、海外で国際会議を実施する(or コンベンション)	S
4-3-8	JIMA主催の国際会議を毎年、日本の各地で行う。	S
4-3-8	・国際会議を国内会議化する風潮 ・大変良いと思います。毎日、日本のさまざまな場所で行うよ!と思います	S
4-3-8	大学で連携している海外大学での発表を促進する	S
4-3-8	日本に学びに来ての留学生が、大会にいつも集まって来て発表している状況になると良い。	O
4-3-8	留学生だけでなく、海外からの参加者が多くなっている。	O
4-3-8	人口の多い国を取り込む	O
4-3-8	大会日程が増える	O
4-3-8	JIMAをきっかけに、日本にきた留学生が増えるようにしたい。	O
4-3-8	外国人がJIMAに勉強しに来たがるような大会にする。 →日本の工場見学、企業見学をさせる。	O

■世界的課題を扱う

1-3-1	日本は課題先進国。国内で課題解決の貢献。 例えば、①財政破綻 ②少子高齢化、人口減 ③環境エネルギー ④自然災害	S
1-3-1	国際問題の取組	S
1-3-1	Solve the disaster problem to have more and more stronger on disaster management system in Japan. (ますます強くなる日本の災害管理システムで、災害問題を解決する。) ↓ So, we can ??? foreigner students to come to Japan to study & work. (それで、我々は勉強や仕事で日本にきた外国人学生を...することができ。)	S
3-3-1	TPP(環太平洋戦略的連携協定)に見られるように国際間仕切り?は、ますます大きくなる	O

テーマ4:『20年後のJIMAの姿は?(期待)』①

■産学連携

グループNo.-テーマNo.-区分No.

・S: 提案を深掘りするテーマ
 ・P: 課題をさらに考えるテーマ
 ・O: その他(現状記述など)

■世界的に認められる学会

2-4-4	企業からの参加者を増やす	S
1-4-4	学者・社会人との交流が盛んになり、活気があって、それを見て若い人が入ってくる。	S
2-4-4	産業に影響力をもち	S
2-4-4	企業の事例紹介が増える	S
2-4-4	枠組みを設けて、企業と大学のマッチングを仲介することを期待する	S
2-4-4	日本の産業構造の変化、あるいは社会構造の変化を見通した企業分野とニーズが反映できている	S
2-4-4	日本の産業構造の将来に向けた研究テーマを行う	S
2-4-4	産学連携強化	S
2-4-4	研究部門単位にIE協会と個別ワーキングを行う	S
2-4-4	もっと企業とのディスカッションが増え、より実務的なものになる	S
3-4-4	学会が、企業人が取得しうるような資格を提供している点よい	S
5-4-4	学生、企業人が学会からの発信を常に注目するよう学会	S
5-4-4	学生、大学教員、企業の参加者が集まり、発表セッションに参加して、質疑多くなり、ラウンドテーブルで議論を行う	S
5-4-4	学生、企業、大学研究者が、分け隔てなく研究テーマについて議論を交わせる	S
1-4-4	中堅社会人が自己学習できる場になってほしい	O
2-4-4	企業の参加者が5割以上になる	O
2-4-4	企業からの発表が増える	O
2-4-4	参加企業が増える	O
2-4-4	企業からの問題解決の依頼が増える	O
2-4-4	企業からJIMAに対するイメージが向上する	O
2-4-4	単に企業というだけの認識でなく、規模・業種も認識したカテゴリ分けでの連携が検討されている	O
2-4-4	企業、大学のニーズ・シーズの共有ができていく状態	O
2-4-4	産学協働の活性化した状態	O
2-4-4	学会で出たアイデア、技術が現実のものとなる	O
2-4-4	現実のものとなるために、産業界、特にサービス業との連携が強まる	O
2-4-4	IE協会の参加企業も参加した研究会の運営を行う	O
2-4-4	アイデアが形になりやすい	O
3-4-4	企業の事例を多く持った研究者が増えているようになりたい。	O
5-4-4	有名企業の社長が、よく講演してくれる	O
5-4-4	企業が大会でランチを提供している	O
5-4-4	産業界にも教育界にも一目置かれる存在	O

2-4-6	世界的に認められる学会となる	S
1-4-6	国際問題、影響の大きい技術を扱う	S
1-4-6	Become totally international network structure, like having more international academic researchers. [完全な国際的ネットワーク構造(より国際的なアカデミックな研究者を持つことによる)になる]	S
1-4-6	先ずは、国のあるべき姿を描き、その実現に貢献できる組織になってほしい。	S
1-4-6	経営工学にとって優秀な人材を育成する学会になる	S
2-4-6	強い影響力を持つ	S
3-4-6	経営工学を代表した会になって欲しい	S
5-4-6	テレビで会長がよくコメントしている	S
2-4-6	優秀な人物が見つかる	O
3-4-6	残っていて欲しい	O
3-4-6	目指す学会: 参加者数が増えるような学会	O
3-4-6	学会主催のマネジメントセミナー、統計セミナーに、参加者が殺到している	O

■学生、若手への対応

5-4-7	若い人が入会する、キャリアパスを作る学会	S
1-4-7	若い人の参画を促す、今から若い人への働きかけが必要。	S
1-4-7	若手が活躍できる場の提供	S
2-4-7	学生の発表が増えるような学会	S
1-4-7	JIMAが単独で残っているとすれば、若手が多く、多様なアイデアを肯定的に受け入れる学会であって欲しい。	O
1-4-7	少子高齢化対応: 高校生〜、経営工学の設立	O
5-4-7	ご年配が若い会員を支えつつ、若い会員が中心になって活動して欲しい。	O
5-4-7	多くの地域の先生、学生が多く集まり、たくさん意見を聞くことができる場。	O

テーマ4:『20年後のJIMAの姿は?(期待)』②

■コンテンツの教材化

1-4-3	授業資料として使われる(文庫、テキスト)	S
1-4-3	学会講演のビデオ自体が授業のマテリアルとして使える状態に。	S
1-4-3	Ustreamなどの映像・動画コンテンツで、学会に同時中継、それを資料として様々なに活用。	S
1-4-3	高校、大学で使える工学テキストの作成	S
2-4-3	改善事例、手法の体系化と対外発信	S
3-4-3	論文は特許化	S
1-4-3	どこでも参加できる学会発表一教材化	O

■活動内容のオープン化

5-4-6	Freeで、誰でも参加できる学会。	S
5-4-6	Webを最大限利用して、誰でも内容がわかるようにする。	S
2-4-6	学会、・・・etc 従来のような枠組み・境界のない会	O
2-4-6	ディスカッションの場を学会で設ける	O
2-4-6	ディスカッションの中から、企業が期待するもの(経営工学)をつかんでは	O

■会員増加

3-4-5	各世代が均等に会員になっている	O
4-3-5	会員が2,000名くらいまで増えている欲しい、できれば、もっと。	O
2-4-5	会員数が増加し、研究活動が活発になって欲しい	O
3-4-5	世界的には人口は増えているので、現在の会員を退会・引退させない海外会員を増やす	O